

## 研究の目的と方法

本研究は、キリスト教系組織がバングラデシュ先住民族ガロの社会発展に及ぼした影響を分析するものである。ガロは歴史的にインドとバングラデシュをまたがる地域に住む先住民族として、母系制を基礎とした独自の社会システムを形成していた。しかし、ムガル帝国の統治に始まり、イギリス東インド会社および大英帝国、東パキスタン政府、バングラデシュ政府による一連の統治により、ガロの社会システムは弱体化を余儀されてきた。

その過程で、様々な教派に属する教会やキリスト教系NGOなどの組織が、ガロの社会発展に大きな影響を及ぼしてきた。植民地統治時代のキリスト教宣教団は、ガロ社会への宣教および初等教育導入に貢献する一方で、東インド会社と英植民地政府の統治や経済を支える働きをし、ガロの社会システムを弱体化させる一翼を担った。

さらに、その後のキリスト教系NGOは英国の慈善的・救済的援助を受け継ぎ、ガロに対する保健・医療、教育などの社会福祉サービスを提供し住民の生活の質を向上させてきた。しかし、いっぽうガロの経済的自立を促す経済開発の面では前者ほどの成果は見られなかった。ガロは現在、イスラム教ベンガル人社会の中で、キリスト教を信じるモンゴロイド系少数民族として、土地所有の制限、公職からの排除、高等教育機関からの排除、市場からの排除などさまざまな制約を受けている。キリスト教系NGOはガロを含むすべての住民を対象とした支援プログラムを実施しているが、ガロのみに限定した支援プログラムは少なく、ガロの抱える問題に注目し、かれらの経済的自立を積極的に促すところまでは至っていない。

以上の点から考えると、キリスト教系組織による外部からの援助が、ガロのもっている独自性をかえって損ない、自立的な発展を阻害する要因になっているのではないか、またその阻害要因は、キリスト教系組織の援助が伝統的な社会福祉サービスのみにより留まり、経済開発を効果的に押し進めていない点にあるのではないか、さらに援助機関の方針とガロの考える優先課題との食い違いから生じているのではないか、というのが私の問題意識である。

これらの問題意識をもって、外部組織によるガロへの影響を分析し、最終的には、現在のキリスト教系組織が先住民族ガロの発展を損なうことなく国際協力を実践し、先住民族の社会システムを活かした支援を行なうために、自分なりの枠組みを提供することが、本研究のおもな目的である。

以上の目的を達成するために、本研究ではまず1章と2章において、ガロとはどのような民族で、その社会システムはどのような特徴を持っているのかを分析する。3章においては、ガロがどのような経済活動を営んできたのか、ガロの経済的自立を促す支援が外部組織によって行われてきたのかどうかを考察する。次に4章においては、以上のガロの特徴や社会システムが外部組織の影響を受けてどのように変化したのか、とくに旧宗主国や政府による政策や、キリスト教宣教団によるガロへの宣教政策の推移を分析し、それらがガロの社会システムを弱体化させたとしたら、何をどのように弱体化させたのか、そのためにガロはどのような影響を受けたのかを検討する。さらに現在のキリスト教系NGOの提供する社会福祉サービスを概観し、過去の宣教政策の何を受け継ぎ、何を排除し、何を修正・追加したのかを検討する。また現在なお変化しつつあるガロの社会システムは、ガロの生活の質や経済的自立を促す可能性はあるのか。あるとすれば、外部組織はそれをどのように活かし支援していったらよいのか、という点にまで関心領域を広げた。

以上の問いを明らかにするために、基本的には文献による分析を行ない、筆者がキリスト教系NGOに実施したアンケートとインタビューの結果をそれに反映させた。

## 論文の構成

序 章 研究の目的と方法

第1章 ガロの地理的・歴史的特徴

第1節 ガロの発祥から移動・定住へ

第2節 丘陵地のガロと平地のガロ

第3節 ガロの呼称

第4節 おわりに

第2章 ガロの民族・宗教・社会・文化的特徴

第1節 先住民族

第2節 宗教

第3節 言語

第4節 母系制

第5節 慣習法

第6節 自治システム

第7節 おわりに

第3章 ガロ社会の経済的特徴

第1節 農法の変容 移動焼畑耕作から水稲耕作へ

第2節 市場

第3節 都市で働くガロ

第4節 おわりに

第4章 外部組織による関与

第1節 政府による政治的関与

第2節 宣教団による宣教的関与

第3節 キリスト教系援助機関による開発的関与

第4節 おわりに

終 章 いまを生きる先住民族ガロ

## 論文の概要

本論文では、ガロがどのような民族としての特徴をもち、その特徴がどのように変化してきたのか、またガロ独自の経済活動が過去から現在にわたってどのように営まれているのか、さらにガロ社会の変容をもたらした要因のうち、政府・宣教団・キリスト教系援助組織といった3つの外部組織が、どのようにからみ合いながらガロの社会システム全体に影響を与えてきたのかについて、以下のように考察した。

第一章ではガロの地理的な特徴として、ガロ丘陵と呼ばれるインド北東部の丘陵地帯とその周辺に住む民族であることをとりあげた。約50万人のガロがインドの丘陵地帯に住み、10万人のガロがバングラデシュの平地に住んでいる。ガロがインドとバングラデシュに分割されている理由は、大昔にチベット地方から移動する途中、いくつにも分かれて定住したからであり、印パ分離独立時に国境が引かれたからである。しかし「アチック・マンディ」（丘の人）という自称からも明らかなように、ガロは丘陵地帯でつちかわれてきた風俗や習慣をもつため、ガロ丘陵に精神的なつながりを抱いている。

第二章ではガロ民族、ガロ語、母系制、自治システムなどの特徴を取り上げ、以下のような特徴について考察した。ガロ民族は、バングラデシュ憲法にその存在が記述されていないために、外部からも先住民族として認識されることはなく、自らもアイデンティティをもちにくい状況にある。ガロ語は綴り文字をもたない言語だが、宣教団が宣教と教育の目的のために、ガロ語をローマ字化した。これが結果的にベンガル語の侵略によるガロ語の消滅を防いだ。ガロの母系制は、もともとは母から娘へと財産の所有権が受け継がれ、母の兄弟から甥へとその管理権が継承されていたが、時代の流れとともに変容し、現在は姉妹兄弟に財産が均等に分与され、妻方居住のルールも厳格には守られていない。現在でも守られているルールは、母から娘への姓の継承である。そして、社会における意思決定は男性にまかされているため、父権制的キリスト教が定着する素地があったと考えられる。ガロの慣習法は、成文化されていない慣習や慣行をもとにした規則である。それらには精霊信仰に基づく宗教法や母系制に基づく民法などがあったが、宗教や社会構造の変容とともに失われつつある。ガロの自治システムは、母系制を基礎とするマハリとノクマとクラというシステムに、新しくキリスト教を基礎とする教会組織が加わった。

第三章ではガロの経済活動が外部からさまざまな制約を受けながらも、農業、商業の面で地道な活動を行ない、発展の可能性を示唆していることを述べた。農業においては、焼畑耕作から水稲耕作への変容があったものの、農業技術の向上や生産高の増加が見られた。商業においては、昔からベンガル人を仲介人として市場での取引を行ってきたため、商売に長けているとは言えないが、近年は小規模事業に参入する者が増加している。さらに都市では、先住民族への差別や偏見があるものの、ガロは自らの特性を活かした職業に就いている。

第四章では外部組織の関与によって、ガロ社会がどのように変容し、ガロ自身が何を運び取ってきたかを考察した。英植民地政府がガロの居住地域での通商と治安維持のために、ガロの自治に介入していき、武力と保護政策によってガロの抵抗運動を鎮圧した。さらに政府の政策を推進するために宣教団が誘致され、ガロを精神的に統治した。それに対してガロは両者の後押しによって社会発展を図ろうとした。宣教団は宣教中心から社会福祉中心へという世界的な宣教の方針転換に沿って、教育・医療などの社会福祉プログラムを提供した。これら植民地時代の外部による関与は、宣教団を利用して丘陵地帯の治安を図ろうとする政府と、政府の後押しで宣教の拡大を図ろうとする宣教団と、両者の力を借りて経済的困窮から脱出して社会発展を図ろうとするガロとの3者の思惑が合致したかたちで実現したと言ってよいだろう。

その後、印パ分離独立後には教会付属の援助組織が、宣教団の社会福祉プログラムを踏襲する形で受け継いだ。さらにバングラデシュ独立後にはキリスト教系 NGO が、キリスト教色を弱めながら社会福祉サービスを行ない、それに加えて貧困削減を目指したプログラムを提供したが、先住民族であるガロの問題に対処したプログラムが行なわれていないため、目立った成果は得られなかった。

以上のように、ガロは母系制を基礎とする社会システムをもつ民族だが、その伝統的な特徴は時代の流れとともに刻々と変化してきた。またそれに付随する社会構造や慣行、生活もさまざまな要因によって、現在もなお変化しつづけている。それらの変化には外部からの介入によって抵抗しがたく変化した部分と、選択肢が少ないながらも、ガロ自らが主体的に選び取って変化した部分がある。この選び取ってきた部分つまり現在のガロの特徴に、ガロの本来もつ発展の力が隠されていると筆者は考える。その特徴とは、マハリと教会委員会による問題解決、合議制、女性の地位の高さと行動の自由、外部組織との交渉力、平等を重んじる民族的性質などである。かれらはこれらの特徴を活かしながら、外部に順応し、調和し、さまざまな統治の時代を生き抜いてきた。反対にそれらの特徴を統治者に利用され、社会システムの変化が加速したことも否定できない。

ガロは、140年にわたるキリスト教系援助組織による支援によって、他の民族よりも高い識字率を保持し、保健・衛生の知識を獲得し、組織の重要性を認識してきた。ガロがこれらの利点を基礎として、さらなる発展を遂げるために、キリスト教援助組織はガロの発展を損ねている要因、ガロ自らが優先し、求めていることを積極的に調査・分析することが不可欠である。それによって先住民族に効果的な支援を提供することができるだろうと筆者は考える。

最後に、本論ではガロという民族とガロ社会の全体像、およびその変容と要因を明らかにすることができた。とくに19世紀後半、短期間でのガロの暴動の沈静化とキリスト教化の原因は、植民地政府と宣教団とガロという3者の思惑によるものであったことが結論づけられた。これを契機にキリスト教系組織がガロへの関わりを深め、またガロ社会が急速に変化していったことを考えると、この原因の解明は本論の成果であるといえよう。以上のような植民地政策の影響以外に、ガロの住む地域は、国境による民族の分断、土地問題、国家単位での先住民族の不可視化など、さまざまな問題を抱えている。これらの問題を検証すると同時に、今後は、当事者であるガロ自身の声を拾い上げることも不可欠であろう。これらの点については今後の課題としたい。